

平成 26 年度地域医療・介護連携推進事業 一関コミュニティFM (FM あすも) 番組
放送日：平成 27 年 3 月 25 日 (水) 17:20~17:35 (塩竈一常 GET KING!!)
(再放送：3 月 29 日 (日) 9:10~9:25 REFRESH!!)

「医療と介護の窓～みんなで育てよう地域医療～」

第 18 回放送 一関市医療と介護の連携連絡会 幹事長
一関中央クリニック 院長 長澤 茂 先生
(聞き手：FM あすも 塩竈一常)

塩竈 「医療と介護の窓～みんなで育てよう地域医療～」一関市では、高齢化が進む中、住み慣れた地域で安心して暮らせるよう医療から介護への切れ目ないサービスを目指しています。このコーナーは、医療機関や介護施設の役割、また、その利用の方法を医療・介護・福祉の関係者とそして私たち市民が共に理解協力することを目的に一関市健康づくり課の提供でお送りします。

塩竈 このコーナーですが、平成 25 年度の放送開始からほぼ 1 年にわたってお送りしてまいりました。昨年 2 月 12 日が初回の放送だったんですが、この時にお越しいただきました一関中央クリニックの院長、そして一関市医療と介護の連携連絡会幹事長の長澤茂先生にお越しいただきました。長澤先生、よろしくお願ひします。

長澤 どうぞよろしくお願ひします。

塩竈 先生にご出演していただいてから 1 年が経つんですけれども、1 年ぶりのご紹介ということで、どうぞよろしくお願ひします。

長澤 こちらこそ、どうぞよろしく。

塩竈 先生に一番最初にお越しいただいた時には、この「一関市医療と介護の連携連絡会」、一体どういった会なのかというところをご紹介いただきました。さらには、1 年間にわたってどのような方々に登場していただくというところまでお話を伺ったんですけれども、先生、この医療、それから介護を取り巻く環境というの

は大変厳しい中で、さらに様々な職種があるというのを僕も学ぶことができました。

長澤 そうですね。やはり、医療資源という見方からすると決してこの地方は潤沢とは言えないと。数字で言いますと、人口 10 万人対医師の数が 200 というのが全国平均ですので、一関市全体では 170~180、これを東西に分けますと東の方は 100 を割り込むという状況ですので、医療職のみならず看護、介護職、その他諸々の方々のお力を頂戴しないとこの連携というのは上手くないかなと、そういうふうな状況から生まれた会だというふうに存じ上げております。

塩竈 医療と介護の連携連絡会、組織されたのは平成 23 年度ということですね。今先生にご紹介いただきましたように、その医療と介護、連携を深めていく、そして市民 1 人 1 人が望んでいる医療・介護サービスの提供を目指し、いろいろな研修等を行っているということなんですが、この 1 年間振り返りますと、先生どのような研修などが行われたんでしょうか。

長澤 様々行ってきておりますけれども、昨年は思い起こすまま見ておりますと、認知症についての講演会、あるいは口の口腔ケアと言うんでしょうか、飲み込み、それに付随するむせ込み性肺炎を防ぐための口腔ケアという非常に大事な研修会、今在宅で過ごされている方がとても多くなりましたので、その方々の日頃飲んでいる薬の管理をどうしたらいいかという在宅の服薬、これについての勉強会、あるいは今年の 2 月 1 日から動き出しました、その連携シートという、私たちは「くらしのシート」「退院シー

ト」と呼ばさせていただいていますけれども、これを作り上げるため医師会の先生方、あるいはケアマネジャーさんお集まりになって、いろいろな角度からご審議をいただいて2月1日から動くようになったと、その大事な研修会もありました。それからあとは、市民フォーラムで、救急医療についてということで県立病院の先生方からご講演を頂戴し、それからシンポジウムの形で地域医療を考えると、一般の方々あるいは県立病院の応援隊等々の本当にいろいろな角度からご意見を頂戴したシンポジウムを開かせていただいたというふうに思います。

塩竈 なるほど。具体的な取り組みで、今先生からもお話がありましたけれども、「医療と介護の連携マニュアル」平成27年2月付けで、この医療と介護の連携連絡会の皆さんでお作りになったマニュアルなんですけれども、ページをめくっていきますと、目的というのは番組でも紹介していることなんですけど、連携の大切さ、具体的にこのように取り組んでいこうというところ、それぞれの専門の皆さんの拠りどころと言いますか、指針になるようなものが作成されたということですね。

長澤 そうですね。順序からいきますと、医療機関にかかる時に、あるいは不測の事態があって入院を必要とするような状況ですね、現在までは医療機関の場合には紹介状という形で向こうの医療機関の先生方へこういう状況ですとドクターが書くものがあったんですけれども、全ての方がそういう形では動き得ないということ、十分そういう状況がありますので、これはご家庭でもあるいはそういうご家庭に類似する施設でも、この方はこういう薬を飲んで、こんなふうな例えばお腹が痛くて今日は来たとかですね、あるいはお身内の方と住んでいる住所が離れているような場合には、この方がその連絡先のご長男ですとか、そういういろいろなことを分かりやすく医療機関に伝えると、そういうものが入り口に位置する「くらしのシート」というものであります。

塩竈 なるほど。医療をこれから受けていく、

介護を受けていく、そういった方の基本情報と言いますか、そういうものがここに書かれているということですね。

長澤 そうですね。

塩竈 これまでは先生がおっしゃっていたように病院からの紹介状であったりとか、医療機関であったりとか、かかる所でフォーマットがまちまちだったっていうことがあるようですよね。

長澤 そうですね。大体はざっくりとは同じ様な形ではあるんですけども、そこは専門職から専門職ですので、それぞれの連携と言いますか、という所で留まっていた。これを少し裾野を広くして、分かりやすくして、医療職のみならず、その方の健康管理、あるいは一緒に暮らしている方々から情報を発してもらおうということでもありますので、広くこのことが動くことによって、医療機関でもこの方はこういう生活、あるいは家族歴、あるいは、どこかの医療機関の薬でお世話になっているということ、いち早く情報を届けるというふうな目的でありますね。

塩竈 なるほど。同じような例えば仕事をしたりとかですね、取り組みをする中でも、その会社で仕事をしてもそうなんですけども、その場所その場所によって言葉の言い回しというのが微妙に違ったりとか、同じ現象を表す言葉でもその慣例で使われている言葉の違いというのがありますけれども、この「くらしのシート」をめくっていきますと、それぞれ書かれる言葉というのも共有する1つの言葉に集約されていたりとか。

長澤 はい、そうですね、できるだけ簡単に分かりやすくということで作らせてもらったということでもあります。

塩竈 医療機関それから介護機関などを受診する際に、生活の情報であったり、介護の情報、これまでの既往歴、こういったところを伝える

ための「くらしのシート」、これは本当に治療を行うスタッフにとっても重要な情報になるということですね。さらに、治療を受けた後に退院をする、医療機関から退院するその先には、家庭で看護していただいたりとか、それからまた介護施設に行ったりといろいろな状況があるわけですが、それらに連絡をするための「退院シート」、こういったものもできあがったそうですね。

長澤 そうですね。従来は、看護サマリーという呼び方で、主に看護職の方々が入院中はこんなふうでしたよ、こういうふうなことでご病気と付き合っ、薬は少し増えましたとか、あるいは良くなりましたとかということ、同じ看護職同士でのやりとりということが基本だったわけですが、これをまた病院に全ての人に戻るということではないので、在宅に戻る場合もありますし、その病院からあるいはその施設に戻るということを考えますと、もう少し分かりやすい「くらしのシート」並みのことをプロの看護職の方々から情報を発していただけないかということ、皆さんからお知恵を頂戴した結果、この「退院シート」というものができ上がりました。

塩竈 なるほど。この2つ、言わばその情報を共有していくためのシートというものができ上がったわけですが、まさに医療と介護の連携連絡会議という言葉にぴったりのふさわしい感じのものができ上がってきたということですね。これを作っていく中で、苦労されたことですか、これができることによって皆さんからどんな声が届いていたりしていますか。

長澤 苦労したことはあんまり無かったんですけど、むしろ病院の先生方、私は特に院長先生方とお話しをする機会があって、こういう事をやりたいんだけど、あるいは必要だと思っただけでもとお話をしますと、ほとんどすべての先生方が大賛成だと、ご賛同の声を頂戴したということで、みんなそのことをこういう連携、多職種での繋がりを求めているんだな、あるいは必要としている先生方、今そうい

う気持ちで医療に携わっているんだなということをとっても意を強くしたということをお覚えています。それからもうひとつは、多職種の方々からこれを作ったことによって、作る段階で多職種の方々のご意見を度々頂戴しました。それで、これがみんなのお知恵でこういうものを作って、これはそれで終わりではなくて、このことがこのシートを利用するご本人の方、あるいはその方に寄り添っている家族あるいは施設の方々等々、いろいろな職種の人達を含めてですね、一般の方々がとてもこれについてはご賛同を頂戴して、それで事務局のお話を聞きますと、ホームページの医療と介護のホームページのアクセスが、シートができ上がったからぐんと増えたと、年間7,000件近くアクセスに繋がってきたということですので、ずいぶんと反応、評価と言いますか、よろしいんじゃないかというふうに思っております。

塩竈 なるほど。先生から一番最初にもありましたけれども、限られた医療資源、それから介護資源の中で、それをこう効率的に動かしていくためのそういった情報共有という形ですね。医療・介護関係者の皆さんそれぞれの信頼関係を基にしてでき上がったマニュアル、さらにこれを市民の皆さんとまた一緒に活用していくという動きが大事になるわけですね。

長澤 そこが一番の重要なポイントだろうというふうに思いますね。プロの連携、多職種の連携のみならず、それが何の目的かというところ、一般の方々がそのシートがあるために、暮らしやすいぞと、あるいはその生活、医療その連携のシームレスなどと言いますか、途切れない連携ができるぞ、この地域はということで、一般の方々が良かったなって、そこが最大の評価に繋がるだろうと思います。

塩竈 1年間にわたって、この「医療と介護の窓のコーナー」で様々な皆さんにご出演いただきまして、この一関市で取り組まれている医療それから介護のそれぞれのお仕事についてお話を伺ってきました。ラジオを聴いていらっしゃる皆さんもこれは専門の皆さんだけがそういう

ふうに取り組んでいるだっというのを傍から眺めているだけではなくて、自分自身にこうやって関わってくるものなんだってところをあらためて皆さんにも感じ取っていただけたらいいなというふうに思います。一関市のホームページ「一関市医療と介護の連携連絡会」このページに、今番組の中で長澤先生にご紹介いただきました「医療と介護の連携マニュアル」、それからその医療介護に携わっている方々、それから私たち市民を繋いでいく「くらしのシート」「退院シート」についても詳しくご紹介されていますので、ぜひご覧になっていただきたいと。さて、その信頼関係を図ることを目的に作ったこの連携マニュアルというのが今ここに誕生しました。これから先ですが、一関市医療と会議の連携連絡会、どういったところを目指していきましょうか。

長澤 先ほども申し上げましたように、どういうふうシートが役に立っていくかということ、それぞれ見極めていく必要があると思えますし、このシートは現在皆さんの英知をいただいて作ったんですけれども、まだパーフェクトっていうことではないと思うんですね。ですからいろいろこれはフィードバックをしていただいて、少しでも使いやすいようなシートに仕上げるということがひとつあるかと思えます。それからもうひとつは再三出ております、医療資源の乏しいこの地域で、どういうふうにして、高齢者あるいは障害を持っている方々、あるいは困っている方々の連携のために役に立つか、そこを目的にして医療と介護の連携がどういうふうにもう少しこの地域に還元して、みんなの力をお手伝いできるような形にしていくかと。これは私見ですけれども、一関市というところをひとつの括りとして今までは動いておりましたけれども、一関市は非常に広いんですね。ですからそこら辺が、地域地域で私のところはこういう資源が潤沢だけれども、こういうところが少し乏しくて困っているよということを、それぞれの地域の診断書みたいなものを出していただいて、そこにお手伝いできるところは、医療と介護の連携を少しずつ濃密に広げていくこと、それによって困っている地域のないように

というふうなことを今年は頑張ってみようかというふうに考えております。

塩竈 なるほど。この連絡会に関わっている皆さんたちの知恵、それから私たち市民の知識それから知恵、いろいろなものが集結することでこの地域の医療を支えていく、そういった流れになっていくということがこのコーナーから伝わってきました。「医療と介護の窓～みんなで育てよう地域医療～」のコーナー、これまでにご紹介しました放送内容などは、一関市のホームページ「一関市医療と介護の連携連絡会」このページで確認できますので、ぜひご覧になっていただければと思います。スタジオには、一関中央クリニックの院長、そして一関市医療と介護の連携連絡会幹事長の長澤茂先生にお越しいただきました。長澤先生、どうもありがとうございました。

長澤 お世話になりました。ありがとうございます。

塩竈 一関では高齢化が進む中、住み慣れた地域で安心して暮らしていけるよう医療から介護への切れ目ないサービスを目指しています。地域医療体制の充実のため、私たちも積極的に関わっていきましょう。「医療と介護の窓～みんなで育てよう地域医療～」このコーナーは一関市健康づくり課の提供でお送りしました。